

入学前課題講評 国際文化学域

今回の課題は、次の3点から1点を選んで著者の見解を要約し、それに対する自分の考えを具体的な根拠をあげながら論じるというものでした。

- ①池上俊一『森と川——歴史を潤す自然の恵み』（刀水書房）
- ②岡田英弘『世界一周の誕生——グローバリズムの起源』（文春新書）
- ③河井祥一郎『シェークスピア——人生劇場の達人』（中公新書）

例年と同じように、三分の二ほどの課題提出者が『シェークスピア——人生劇場の達人』を選択しました。英米文学専攻を希望する入学生の割合から考えると、この選択率は高すぎるといえるでしょう。おそらく入手しやすく、またととつきやすいテーマであることが影響しているように思われます。西洋史専攻や文化芸術専攻を希望する入学生の皆さんには、ほかの本にチャレンジする気概を示していただきたかったと思いました。それとも、この二つの専攻を希望する入学生の方々にもっと関心を持てるようなテーマの本を提示すべきであったのかもしれませんが、それは専攻側の問題ですので、再考してみたいと考えています。

内容に関しては、こちらをうならせるような中身の濃い論評もあれば、本の内容をただ説明しただけのものまで、多種多様でした。優秀なものとして目立っているのは、簡明的確に本の内容を整理したうえで、著者の意図を読み取り、そのうえで現代の問題に引き付けながら自分の見解を述べているものです。あくまで割合上の問題ですが、『森と川』および『世界一周の誕生』を選択した論評にそれは多く見られました。

なかには、本の内容とは関係なく、ウェブサイトから関連する文献を探し出して、いわば勝手に論を展開しているものがしばしばみられました。その中には興味深い内容のものもありましたが、この課題の目的は、本の内容をよく理解したうえで、自分の見解を述べることにあります。著者が何を目的にしてそのような著作を書いているのか、じっくり読み取りながら、自分の思考を深めていく態度が必要です。勝手に読み方をしていては、本の著者との会話ができません。また、その本が読むに値するのか、判断することができません。それはものの価値を見極める能力の問題にもつながります。ぜひ、腰を落ち着けて、読書を通して著書を読み、その意図を探り、著者と会話しながら、その本の価値を考える習慣を身に付けてください。

最後に、ほとんどくり返しになりますが一言。ネット社会のなかで情報があふれ、私たちはネットから断片的な知識を身に付け、そこに含まれる政治性や社会性を見抜くことなく、安易にその情報を受け入れてしまいがちです。そのためにも、その著者の意図を考えながら本を読み込む訓練によって、物事を適切かつ独自に判断する能力を身に付けることが必要不可欠になっていると思います。皆さんにとっての四年間が、そのような能力を十分に習得する年月になってくれることを切に願っています。